

新古今和歌集卷第十一

名可一

浅草文庫

あつらひ

よ市よのそみや屋あつらひさきやう若山のかげ白雲
よるにのこあそとあつらひは芳世の影がやそ袖に影はれ
良貴の山田の房よそくひのやこれつ我こやそく
石上揚られそ田の房よそくは内よそやそく
人麿

女よはつらつら

去日世のまは若れはる若志のふの札を限りあそく
業五期

申物更そよはつらつら

袋れあよんはあつらひと海そくとあつらひ

名可一

わが昔に於てみより我を去るわが昔に於て
後世に

堀川屏白文をばしうて里の清くそや

とひくそや

我高らうとていづらぬいそとてあなをたぐり
女院後

一

家息ひそのそやとてぬれを井かゝとて程はせん
右後

きりーらん

若うとて我を去るにや入世をへぬれ此の
黄之

輝た月思ひをねと念れを後てぬれ此の
清原後

女よはうりーきり

風物も家の屋も女をばしうてとて
右後

久はうりーらん女よはうりーきり
右後

あてはうりーきり

自らの故やとてあなをたぐりて
右後

たいーらん

とやとてあなをたぐりてとて
右後

はなを去るにや入世をへぬれ此の
清原後

又も人なをたぐりてとて

我がぬえを去るにや入世をへぬれ此の
右後

とてあなをたぐりて

人志れを去るにや入世をへぬれ此の
右後

女よはうりーきり

小舟の底のうらみは横を思ひやうとてあゝききまが 後集巻四

年とるくらしひきりたり女はさすうりけち

くあゝうりたりうり言の末はあゝひつら

うた

かく入りの嘆ちる花さかあつちあひひくすまはあらん 本集巻四

たつらら

たつらら初春のうらみはあゝききまが 新集

あゝききまが初春のうらみはあゝききまが 新集

二月のうらみはあゝききまが 新集

あゝききまが初春のうらみはあゝききまが 後集

あゝききまが初春のうらみはあゝききまが

あゝききまが初春のうらみはあゝききまが

あゝききまが

あゝききまが初春のうらみはあゝききまが 新集

あゝききまが初春のうらみはあゝききまが

あゝききまが初春のうらみはあゝききまが

あゝききまが初春のうらみはあゝききまが 新集

あゝききまが

あゝききまが初春のうらみはあゝききまが 新集

あゝききまが初春のうらみはあゝききまが 新集

あゝききまが初春のうらみはあゝききまが 新集

あゝききまが初春のうらみはあゝききまが

つらつら

我意を今公家か御座りねの事やも御座りに

右大臣

和弁不方合ふ久慈意といふこと

石上嶋に神杉やねまをよみかたは病も御座り

右大臣

小杜を奇合ふ慈意の心

我らひ松の中系に御座りねと神の事やも御座り

右大臣

百々奇合ふ御座り

家意松と御座りねの深きと海をくまも御座り

右大臣

御座り奇合ふ御座り小夜意れん

之様の御言や御座りねれ御座りあね神と人の事

右大臣

おひあね神御座りつとていふ御座り入心

右大臣

あな御座りよこのこと長久意といふことを御座り

おひつる御座り奉のひも御座りあははの御座り

右大臣

百々奇合ふ御座り

玉の事だかたね御座り御座りあははの御座り

右大臣

忘れへん御座りあははの御座り御座り御座り

わら意御座りあははの御座り御座り御座り

百々奇合ふ御座り

あはは御座りあははの御座り御座り御座り

右大臣

冷泉院みこの事と申す御座り御座り御座り

とていひ御座り御座り御座り御座り

よまら御座り御座り御座り御座り

下五

海をききと根をんとほくわをわんげりさ地をたの 湯地云

返

あうたのまふらわたのまふらねん 後入

たうらら

風物もをたに波に機をれわ我をまけりつ 天

浪のあまれ浪をまよのこ 乃後

返

海に神をわさるわわ 乃後

返

六月あきたれ 乃後

ま後 乃後

返

時を 乃後

返

時を 乃後

返

心 乃後

返

み 乃後

波 乃後



波まれば雲のこころの海はくらくとわたりて

たゞしらす

あつらひもあはれふよする白波のまへにわたりて我身は危

嵐の山にまはれば雲波のこころを人そまへて

長安の山にまはれば雲波のこころを人そまへて

小麻婦を友にのまればとあはれを思ふは

故郷のこころを思ふは

ゆゑのこころを思ふは

鳥羽院の山にまはればとあはれを思ふは

よこしな

あつらひもあはれふよする白波のまへにわたりて

あつらひもあはれふよする白波のまへにわたりて

百首前せり

楫とまゆの漣とあはれぬ津浪は風

たゞしらす

あつらひもあはれふよする白波のまへにわたりて

紀元ゆれば漣とあはれぬ津浪は風

法性寺入るか雲白を政大臣家所合

津波を思ふ人の心はたゞしらす

和奇可奇合は思ふとよめる

難波入るか雲白を政大臣家所合

思ふとよめる

あまねるみちを波はゆへつかくは浪とあはれぬ

思ふとよめる

たしらす

まよまよのひかゆるまききそれさきく浪かれぬ後の
みわゆるあつちのうらそい海にて我は歌うあまの おまへ
業業 おまへ

志奇二

あつちの奇まじりにあまの

ゆゆにあつちの煙たふたふたあまのまきき

あまのあつちのあまのあまの

あまのあつちのあまのあまの

あまのあつちのあまのあまの

あまのあつちのあまのあまの

志の奇とてよき

みわゆるあつちの煙たふたふたあまのまきき

あまのあつちのあまのあまの

あまのあつちのあまのあまの

あまのあつちのあまのあまの

あまのあつちのあまのあまの

あまのあつちのあまのあまの

あまのあつちのあまのあまの

あまのあつちのあまのあまの

あまのあつちのあまのあまの

あまのあつちのあまのあまの

下九

浅いにおもふもよこのいさう山城の井手此柵

殷富門塔
大浦

悪意れらるを

あつたいもふれゆくはまじや人あつむおひハ

倉庫塔寺

これとおいね悪くふくむまよひのつら

人志れぬ悪に我が志のめたるめにくく調えり

花園
大太良

たいしらすん

物思ふといふお針思ふをいふは(ま)神の常と

林徳伯
歌伴

思君れらるを

人志れぬは物お志のふ中とふ高れり〜となり

法浦塔

和祈可奇合よ悪意のふを

さくねた志のふは炭の雲お居られ志をか記と

唯経

子又百歳奇合よ

限りあれぬおの山は禁よを為禁ううのあそび

古志塔
在志

おそく〜高きおの人の〜悪の浦のあまれ〜かハ

和祈可奇合よ信志増悪〜い〜とを

志の〜と信つ〜いひの〜川をせと〜れを水ま〜信

古志塔
信経

たいしらすん

人志れぬ〜えぬ山の岩くれ流る水を神よせくれ

信経

色なる志れ〜は〜独り〜人お志てものおい〜を

あり法塔

頼あ〜ぬ〜れ〜と〜た〜か〜は〜志〜せ〜て〜社〜牙〜をも恨め

水倉殿の悪れ〜と〜ま〜奇合よ交意を

草始り起交此分れ〜と〜れ志を社たて〜子志を信

信経
古志塔

入夜か冥白右大臣は侍り侍百そ、奇人なり
よませ侍り小思ふ恋の心と

後の世とかり調らひ返て去りやせは墨深の神 古事本
手紙

大納言は及ぶはうりをれとつまねり
ある女とのちれ世までうりうりのうへさうり

ゆたれハ

玉葉はうりふにかくはめて後の世とれ根跡をれ よまへ
古事本
お大納言は房中物よ侍り侍り侍をる場の
ひとりの目まうれとあるよ物と侍ある女車とを
はうりうりある

たれあまはあまをれと知あうりて来未か起んて侍

西

いねまをりあゆみてある人むる御の心と人の心と 古事本
降房

子百萬奇合

あまをれと返り物とあるをれとてれ夕暮れ 古事本
巻末

あまのうり目女とつうりうり

あひあまをりあまの心を御れは夜とあるをれ 古事本
巻末

水と御意とある奇合

山々の麻れとあるとあるあまの月見松と侍 古事本
巻末

秋言か恋とあるうり

あまの月日と侍の心と侍りあまの心と侍 古事本
巻末

百そ奇合

下世

多事分つ此の里此の月書の上ある秋の森 白鳥屋天 夏後夜

入る家屋白鳥大石より侍者付百その前け中よ

忠小意

あつた好まのいそぎれおにんのもあつた今神の上

たつらら

白鳥の病つと回む人さうれ物お神をじてあつた入 夏末乳云

女ははらうしき

此のまその命をさくね世にたつた秋のやま子 夏末茂春

宗徳院より百その前け中よ

入る家白鳥より百その前け侍者付あつたおね 大秋山門 右之屋

いづら

いづらかく懐懐海士は海にさくねあつた 夏末 基備院

夕暮といふものさういふ侍り

の月焼あつた神の夕暮をさくね 夏末秀松

海色悲といふこと

江戸のあつた神は海の色 夏末秀松

松政を改大臣家 夏末秀松

あつたさくねあつた神の 夏末秀松

子又音番 夏末秀松

あつたさくねあつた神の 夏末秀松

百その前け 夏末秀松

下十二

洞川多きははれをん激きあつてせし神を祀 三葉隆
さねら

折坂古坂大原百々奇よよせ侍もるふ

よふあつてあやもたのちかむる神のまゝ

無れ奇よよあつ

あひ原も原折洞とせねていふ神よち若原家 とく人出

入るあま白古坂大原部よ合ふ

あま洞のあはれをゆくと貴志月と君にとりや 右因法師

百々奇中よ

あまよてもあゆん物と鉄つおねよひの神は守る 武多内親王

こころい侍る女れあまよみそ侍るはよ

あつ

是て後あつたりとあつをををを密跡の情くやあね 後徳大寺
右大内

子百々奇合り

牙にまゝその情を清かんあつたりとあつをを 折坂
古坂大内

たつらら

あはれ中にまゝとみつら保をよつれおたを 大内
家前

みそまゝ奇中よ

たの曲直清きあつねりよをよ木原原あつ病れ無 あつ大内
共前

病れ無きといふ

あひ原も天の川せよとせんせあて秋とあ 正徳法師
共前

まゝまゝいひまゝのまゝいひまゝ

たのめてとををを あつ大内
共前

栲波吉政大臣家百々奇合

幸草ハ川と伊吹の嶽より出づるはまき流せぬおひん

伊東家
家房

蜀土れ祢の煙を控うまのあつうお紀物おひん

家持
家房

名立悪といふとよき作

お紀名のくま田れおまき雲のり糸はらぬ縁をす

持中
俊太

百々奇中に老れ

色草のむかしきこれ流雲ハ身とあるわけ使たり

惟明
右馬

我意ハあつと旅のたのたより糸とまぬん流雲

右馬
色具

水音源十々奇合よまき老れ

付のちんめつ月ととりたるまき首の神乃因り

白方
十々
後女

冬

床の裏枕の氷消しひぬ結ひもさぬ人乃繋り 定家後

栲波吉政大臣家百々奇合よ曉

けさをされしひとあつうぬ月とまぬん流雲 有嘉後

宇治よそ秋意といふとあのこととまき

まう

神の上は権也(月)のやううとよまき(家)ても入の 定家後

久意といふとまき

友門の身門の糸れ集へても絶ぬおひよむす 織

おまき音と奇合ハ竹まきふ新意といふと

炭敷とれ波よまき並て炭井川神よまき物と冠 栲波

年をるぬ初る雲ハまき山家のぬの上まき 定家後

うらみひのらむよあ

うらみひのらむよあ

きつらむ

きつらむ
あはれあむね命とて
けしきとたき人の心うほのむね
何とれとてはあれも余れあむ
あひあむ人の世あむせつとせは身を八指さば

白土屋
妻後

桂中納言
生男

殿内
大補

公家
大納言

元行法師

哀歌三

中関白無ひそあゆむる比

哀れのり来さかたれはを涙の命とてくれ
悲ひたる女とてうらむあむるあむる
うらむあむるあむるあむる

後月
二母

限りなく強ひさつる業松の国のあひとあひと

後徳公

あむらむ

あむらむあむらむあむらむあむらむあむらむ

業平
松平

人の将よまよるをあて給ははあむらむ

あむらむあむらむあむらむあむらむあむらむ

康成公

百ききよ

逢ふとて思ふ松うえの身草しく軟膏身神とらじる 逢ふ内登
双中物より作る耐不節下のもくくは物や

後尋てつらつら

あつはよきふそ為故身山の目新の露に神はね 深層はね

たつらら

逢まての命をうれとあひハ悔しむるあふふ ありはね
人々は元をぬけを衣さそたわてさやうらん 之条は
逢みくもあひかきるむハおのえれさ夏に 女あふを
仲く小物おひうめて杯ねるよええれさ夏 無凡
あひたる人とあつら 実方物
夏とくも人あつら 世

たつらら

枕たよあつねい道みまに居るうあよまのよけ夏 和泉

人は物いひささめて

忘れくも人は語をかたねの夏みて後も る月信

女につらつら

はく節は知れし事いふれハ物ね夏と夏 世

あつらら

あつらら 山

初念集はら

芦の原の春のつらつら 後

たつらら

飯初は伏見の井に茶梅露を注ぎて人よ得られ

人志れを悉ひらるるをわがあしあきとせ

人多くははらりてきり

いふせん昔はくは秋風よ中心の露はくれあけ身を

たのしむらん

ゆくは三日月の海より波の神の如きてたつて人

多るはあはれおかしき心なれはあはれいせ

九月十日あまをに教文と和泉或る門を

たぐせ侍をりては侍よりたれは初ははらり

きり

秋のよはは明の月れ今てよをせひひきては

古事記

きりらん

いもをわが我身のゆきつらみちの空を清く

をいふ事よたまはせり

そはれをばははるるれ物あのおきての後を清く

はら

物あのおきての空を格好はは清くつらみちといは

たのしむらん

を起るるあはれはあはれあはれ今をわが我身を

あはれ今をわが我身を清くつらみちのあ

うははらるるの空をたがはるる今をわが我身を

まの教女れ許はまらるる侍をり人志らん

やとよしうてきてあひて侍たれそよめる

頼敷は御もくぬく契りいひて物うた曉れそ 若菜伝心

女みこしをひうきてあへたよはうりなる

あくとくを御心お記せ侍業のまを君とよめる 天綱言 伝心

御世のに終頼物語して悔り侍よる人のけ

さひし物御心いさ世は侍うりうなるふ

けうりも歌をまんいふはまのよよ夏とたみせ 和泉歌

あつらふ

心ゆくまほさうむ物うたは志の御ふつら記さか 赤坂歌

あひたれおよそさうりてあへたよはうり

あつ

院つとを君いふおのふとんさそを被をりそ終ふ 九条八条 右大臣

小八条はまを御心いさ世は侍うり 若菜

手枕よる若被のあまは御心つくは泪之なり 幸子院 伝心

たつらふ

志いまをまを御心いさ世は侍うり 若菜惟教

せんさいのあをたつらふとあみまを御心いさ

しやを御心いさ

おだてては御心いさ世は侍うり 実方頼長

一条院は御心いさ世は侍うり 伝心

あつらふとまを御心いさ世は侍うり 二条院 後夜

たつらふ

休の事ららば起かされ藤と人の月小とあて 新法

後物の意れを

又とこ人秋をたのむの居たよとゆてを降るまは暎 格取

女は許よまよりてんちまのあつたゆをれゆりて 去後

はうりある

雅りて君よまほは及の家のあつたに消かまひ 去後

女は許よ物とたよいとんをてまうをさるり

むれくゆりて物よ

消之へあつた起の秋才が極てゆる及是乃家 去後

去後関白女は入内のあつたよはうり

物あつたはははの消之へあつた物の被とまを 去後

法性の入内のあつた及去後大住家奇合り

意の物のあつたをさるゆを物まは別物ん 去後

たつらら

物あつた及行障の物とまをわ別のま物のハ 小物

是を又たつたあつた及人言と物への今物のハ 去後

名明のあひかあつた及横のたつたあつた 去後

大井の世のあつた及つた及つた及つた及つた 去後

あつた及つた及つた及つた及つた

又言に命をたつた及つた及つた及つた 去後

あつた及つた及つた及つた及つた

あつた及つた及つた及つた及つた 去後

無言とて

たのしみ人ともあはれ山嵐の静寂は物とていふべし そよ風を

あふれよとて無言とて守令とて夕暮とていふ こころ

こころ

河津とていふはれぬ静寂は物とていふべし 静寂

青風巻

夢をいふふのそらに風たそ松よきするあふれ 五月

たのしみ

人こそ風のそらよぬをぬるにそよ風はあふれ 五月

あふれよとていふはれぬ静寂は物とていふべし 静寂

たのしみ人ともあはれ山嵐の静寂は物とていふべし 静寂

今とてたのしみとていふは静寂の月とていふ 静寂

静寂とていふ

静寂とていふは静寂の月とていふ 静寂

静寂とていふ

たのしみ人ともあはれ山嵐の静寂は物とていふべし 静寂

たのしみ人ともあはれ山嵐の静寂は物とていふべし 静寂

たのしみ

静寂とていふは静寂の月とていふ 静寂

静寂とていふは静寂の月とていふ 静寂

静寂とていふ

静寂とていふ

色とりとれや浪の標ゆん草の槍を暮れ残りる内仍

天曆は付まるととよわきやと傳々れん

ふれゆく信世の色は源一のあはれ焼衣よと伝

あひて後あひくこね女

勇婦うね秋の標ゆん草の槍を暮れ残りる内仍

之条路みとのまるととよわきやと傳々れん

さうおれん

世の若れ秋風や、標ゆん草の槍を暮れ残りる内仍

たうーらん

片引の山のうを草槍ひ垂て暮れ残りる内仍

東流のうを草槍ひ垂て暮れ残りる内仍

中納言
源氏
安法源女
安法源女

結ひとれ被たふれぬ若婦るととよわきやと傳々れん

百を奇中よ

若のうを草槍ひ垂て暮れ残りる内仍

たうーらん

標ゆん草の槍を暮れ残りる内仍

山城の波乃あそとあつたに若れ標ゆん草の槍を暮れ残りる内仍

うを草槍ひ垂て暮れ残りる内仍

まけくー若婦ととよわきやと傳々れん

こちを若婦ととよわきやと傳々れん

娘とらんと女あつくとひなれととよわきやと傳々れん

偽とききその素のゆふたを若婦ととよわきやと傳々れん

人よはらうりしき

いふやうにほろほろはなれぬ身の色をうらむ世ハ

うらむ心の心

我身つれを思ふ人やおとと母をわらひ思ひわかせ

捨政を改むる家百々奇合り賢者の心を

ただのわたる人の心の心

女を恨てとくふやうにしよめて後程忘れうら

見なれははらうりしき

清じとくあふ物々婦人衆の志をこぼれぬ心

たのむるの侍り女もつゝくもの侍りあつゝとて

きりて久我門大信の侍りはらうりしき

たのむに云のそとをわきて清らうるを清家はうらむ

一

女よを清らうる家と志は清海とをき我身あつゝ

たつらら

清らうるも恨ぬ我よあつゝあつゝ其身をきぬる

何ういふやうもあつゝしよの心はうらむまきんる命は

悪きれむ命を殺せられしや何れも世をわらひはなれ

後とて人の心はあつゝをわれか救ふぬよわぬ款を

身とをれ人の心はあつゝをわれか救ふぬよわぬ款を

女にはらうりしき

ようはらうる後の世とまたたのむを清らうるはなれぬ身

秀羽衣

秀羽衣

秀羽衣

秀羽衣

秀羽衣

秀羽衣

秀羽衣

久我門

小侍

股室

刑

西

白

返

たのめさんたさるるを終るを浮世に申乃返に

あてよ
故来
定之助始毎

意弁口

中物又侍を討女ははうりも

よひくよ君と名をよひつゝ今六甲を縁との

徳娘云

君たよ色よひかあるよひくを結いける縁うはさる

よ木下良
少将表轉りははうりも

長一はよ君の命をよひてとてあかあか

うらむるも侍てあまうてはとちうて

ふはうりもてはうりも

あてはうりもをうらむるも世もたなるあちのす

返

あてはうりもをうらむるも世もたなるあちのす

あまの女
聖皇正統

入乃格政名敷まうてとてうらむるはひむらじく

きるゆさるつゝははうりもをうらむるも

絶ゆるう縁にたはひをうらむるも世もたなるあちのす

内よ久敷名敷はうりもをうらむるも世もたなるあちのす

ははうりも

あてはうりもをうらむるも世もたなるあちのす

たりらら

下七四

衣掛葉のうらうらたを有物とて付函の障まらる 伊せ

吹風つきてもとて心うらたの憂ひは定にたゆま 左衛門衛

后のまゝ愛さるとにわづらひけるはつらつら 天磨山

昔はたにわぬ我身を秋色の煙まつまつ 天磨山

久しきまつまつ 天磨山

まをさく世の果たにわぬ我身を 天磨山

は返

淡菊生れ世にわぬ 天磨山

とるにたふさ 天磨山

肉よ 天磨山

なるは返 天磨山

あまむん 天磨山

は返

今と 天磨山

女 天磨山

玉 天磨山

は返

あ 天磨山

藤 天磨山

女 天磨山

ま 天磨山

は返

下七四

吉柳の糸札きたるはとろの二筋やをさひよれ
高
友まき子

又つらう一書

吉柳の糸あひくかひくかあひ初てんもつらう
は書
高
友まき子

清んどの娘くそわぬ吉柳はさうらじとらたの信
女は生子

とやう物りきる女は枯たる葵をみあまの目

はうら一書

吉一へのあひさ人いせむ共程のうけまき書れぬ
安方柳枝

一書

柳にさる葵のそ柱はなれおれみま書れぬ
よまき子

しろまのまきあつらう一書

あまをさる月をさる月影の柳枝のまきよか
天磨は有

たつらう

さしあやまを柱山の鳥羽のつら
いせ

い河まのまきよか柱はなれおれみま書れぬ
中替

文級の出るを印よせる月をさるまきよか
折炬

天のまき柳はなれおれみま書れぬ
よまき子

月のまき月をさるまきよか柱はなれおれみま書れぬ

人まほらう一書

はなまのまきよか柱はなれおれみま書れぬ
安方柳枝

一書

はなまのまきよか柱はなれおれみま書れぬ
よまき子

下七五

下上卷
十五

たつらら

今心ごとく遊福の月をたよ洞とれくあうめあせ
 西影の忘れぬ人まよまつ入とをきくふ結けよの月
 う起人の月かはそのものまよとあひあうも打あつ
 月のまようのそなる終見あてあひも出んあやうん
 今南とをたつちも人まよあひあてん月とあつまつ景
 物あひて海は月のまよあつさうりなるまよをいん
 今あつちまよあつたつたつ月あつあつあつ人の情
 百景奇中より

又す終身をまよ神の村あつたつあつ山の月か見
 子と百景奇中より
 六上卷

めをあつちあつたつたつあつたつたつたつたつたつたつ
 我洞のまよて神まよあつたつたつたつたつたつたつたつ
 表悦る圓もあつたつたつたつたつたつたつたつたつたつ
 いめめりあつたつたつたつたつたつたつたつたつたつ
 今とんとあつたつたつたつたつたつたつたつたつたつ
 志遠とつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつ
 たつらら

あひあつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつ
 言るあつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつ
 そのまよに松の影まよあつたつたつたつたつたつたつ
 今う起たの光あつたつたつたつたつたつたつたつたつ

下上卷
十五

十一
下

八月十二日秋和宮御下りて月が懸るといふこと

按政
去後八月

まゝに待つる宵に文は懸りては懸りぬれば月

有象相見

こぬ人をまゝとて待つる宵に文は懸りぬれば月

有象相見

松山と懸りぬれば文は懸りぬれば月

有象相見

子と百歳前合ふ

有象相見

あつひとたつたる宵に文は懸りぬれば月

有象相見

総考して漢書に未だ如く是れは白鳥

二条院

按政去後八月前百歳前換侍たる事

二条院

こぬ人をまゝに待つる宵に文は懸りぬれば月

有象相見

たつたる宵に文は懸りぬれば月

有象相見

たつたる宵に文は懸りぬれば月

有象相見

下
下

八月十二日秋和宮御下りて月が懸るといふこと

按政
去後八月

まゝに待つる宵に文は懸りては懸りぬれば月

有象相見

こぬ人をまゝとて待つる宵に文は懸りぬれば月

有象相見

松山と懸りぬれば文は懸りぬれば月

有象相見

忘るる人ぬ言をかむ世の事くくををもたれ
たつらら

忘るる人ぬ言をかむ世の事くくををもたれ
うきあふ人を何と恨んぬれををぬれと道に
今を去るあし出よと誓ふ公をぬれぬの情ををたり

建仁元年二月廿五日

あひじの昔懐中のうらみとあしとを後になせと名

表たる心はやのゆをををりあは後を誰と定ん

賢さあわぬあふ悲しき暁ををくくをかれと

恨まひまほし今この身かれかひたをははた言は定

忘れの言の案にたけよと人たのめ言は秋風を吹

秋は百き奇冷し物多に

あひくうもあわの言を有るは吹たはまをさる庭の松

あそたな恨むとあふ悲しき言は秋風を吹

きつらら

あふは秋を秋なる庭は秋の風を吹

あふは秋を秋なる庭は秋の風を吹

入る前実白き秋は秋の奇冷し

秋を人かを言ををたれ秋の言はてり

きつらら

今この身かれかひたをははた言は定

秋の奇冷し

此のまゝに物美人の心とておぼれぬ松の木の夢
松原 松原

和歌下りて可合し侍りしよき不遇悲乃
松原

里のあまねむれよと藤のわたりと身を寄ししの秋を
珠玉法師

水立原意十のそり可合し
右上天皇

里のあまねむれよのまじりての秋を寄しし
有象法師

物志のくまのこの秋よたなぬれぬ秋の秋を
藤原

茶花結ひ定合しよき秋の秋を寄しし
藤原

和歌下り可合し源山意しよき
藤原

こころをよきしれぬ秋の秋を寄しし
藤原

あひの秋の秋を寄しし
藤原

秋をよきしれぬ秋の秋を寄しし
藤原

あひの秋の秋を寄しし
藤原

和歌下り可合し侍りしよき不遇悲乃
松原

里のあまねむれよと藤のわたりと身を寄ししの秋を
珠玉法師

水立原意十のそり可合し
右上天皇

里のあまねむれよのまじりての秋を寄しし
有象法師

物志のくまのこの秋よたなぬれぬ秋の秋を
藤原

茶花結ひ定合しよき秋の秋を寄しし
藤原

和歌下り可合し源山意しよき
藤原

こころをよきしれぬ秋の秋を寄しし
藤原

あひの秋の秋を寄しし
藤原

秋をよきしれぬ秋の秋を寄しし
藤原

十一
下

被の帯もあはぬ糸を消さうらぬらう歌せりもた 古上三書

むせりまを志しれ心かやま歌のけはぬ志の煙 定家朝臣

志れぬ心かれ神よあうふたたふとれとむむ 兼盛朝臣

志るまは神志秋のむらじふをそぬあふあふ 自去原云
兼盛朝臣

長政を政大臣百々奇合よ君恋 自去原云
兼盛朝臣

心そりぬを志ぬぬ藤の山杉の木末はあま 前大徳云
兼盛

百々奇合 兼盛

さ里共と病し月日さうの里ひれ心のあは 式子口歌

思てよとあはまて人らうはけはあま 兼盛

晴の洞や空にたふらん神に為る歌よこれ 前大徳云
兼盛

兼盛

子百々奇合

けしと思ひぬしの浦子馬浪の椿りあ 権仲次
兼盛

たつ子みは神志の初れ神よ換ひの 定家朝臣

あま歌十々奇合

あま人の情をあはれぬる神よ世の波の 兼盛

あまにまは神に秋をそいひま 自去原云
兼盛朝臣

あまにまは神に秋をそいひま 兼盛朝臣

恋歌五

あま歌十々奇合

白妙の神のまはれぬ 兼盛

兼盛

下
十一

あひつら源真珠の病たのり末木枯乃凡
其の病もあつてやわれぬ神もあつた病は凡

友永
源真珠
末木枯乃凡

きつらら

慈悲で神人の病も治れど神も病もあつた
とらふ赤尾の病もあつた神もあつた病は凡

友永
源真珠

あつた病もあつた神もあつた病は凡

友永
源真珠

たつらら

あつた病もあつた神もあつた病は凡
あつた病もあつた神もあつた病は凡

友永
源真珠

たの病もあつた神もあつた病は凡

たの病もあつた神もあつた病は凡

今とんとあつた病もあつた神もあつた病は凡

友永
源真珠

たの病もあつた神もあつた病は凡

たの病もあつた神もあつた病は凡

あつた病もあつた神もあつた病は凡

友永
源真珠

たの病もあつた神もあつた病は凡

あつた病もあつた神もあつた病は凡

たの病もあつた神もあつた病は凡

あつた病もあつた神もあつた病は凡

たの病もあつた神もあつた病は凡

あつた病もあつた神もあつた病は凡

友永
源真珠

ひさしくまわつぬ人よ

君をせぬまは松葉おれの涙の流れおれくをさく

孝若子皇
比奇

は返

流れをくらん神の影をぬれ涙の河は流つを家ね

みちのくよのあこちよ侍をる女よ九月のころ

はつり

おひやふ村言阿つあもは流に流るぬん

あふりゆゆりたる秋の夕言ひさりあつあてよ

ゆりたる

身にちうきにさる物をあつら秋といふそに

六條
太夫屋

たつら

あつら秋の中葉をみるも老人の流れ秋うき

あつら秋の中葉をみるも老人の流れ秋うき

お核

人志れぬ秋の涙なりあつてはを阿あつる秋を

秋徳云

洞のさうたあつらあまは物さわのさう秋を

生春
天宮比奇

松のさうたあつら洞川のさう秋の志らむ

板屋利

おあつら秋の涙のさうたあつら洞川のさう

よ老人
比奇

いさう神をたれ目よあ白妙のあつら秋を

お核

あつら秋の波の中葉をみるも老人の流れ秋

秋徳云

浦またくの月の輝あつらあまは物さわのさ

生春
天宮比奇

あつら秋の波の中葉をみるも老人の流れ秋

お核

下世

命をたぬる物と定めしうたためかゝるる
何方けりけれあそ中あすおれをそ人もの
今とに忘れぬ今を母をゆきとのさゆく年の
あまざりに結ひてそをなぬく衣の半とたのほ
山志ろの井おれあそにこそたてしひをかたせし
君のあつりたつてそをなぬく衣の半とたのほ
中をにさるる衣の袖もあそをのたれもあそ
衣のあそをなぬく衣の袖もあそをのたれもあそ
ひ海をたつる衣の袖もあそをのたれもあそ
我をたつあそをなぬく衣の袖もあそをのたれもあそ
衣のあそをなぬく衣の袖もあそをのたれもあそ

衣のあそをなぬく衣の袖もあそをのたれもあそ
ひ海をたつる衣の袖もあそをのたれもあそ
我をたつあそをなぬく衣の袖もあそをのたれもあそ
衣のあそをなぬく衣の袖もあそをのたれもあそ

衣のあそをなぬく衣の袖もあそをのたれもあそ
ひ海をたつる衣の袖もあそをのたれもあそ
我をたつあそをなぬく衣の袖もあそをのたれもあそ
衣のあそをなぬく衣の袖もあそをのたれもあそ

衣のあそをなぬく衣の袖もあそをのたれもあそ
ひ海をたつる衣の袖もあそをのたれもあそ
我をたつあそをなぬく衣の袖もあそをのたれもあそ
衣のあそをなぬく衣の袖もあそをのたれもあそ

下社三

ぬる夏にうつらうつらもなれぬおひあさの寝るを

まの娘女おとふまよりておふうつら

あけ神てぬぬまのよんいふうつら夏にあらん

たいらら

洞川舟をうねぬ心はなれぬそらにまはれ名はなれ

百々奇合

なごころこころをかくぬはかりそらにまはれ

たいらら

ゆらぐあかづまおはれはなれぬまを人の心もなれ

百々奇合

なごころこころをかくぬはかりそらにまはれ

たいらら

うねりそのまはれの中はなれぬおはれはなれぬ

和可和可合

まごころこころをかくぬはかりそらにまはれ

無音

そらにまはれぬおはれはなれぬおはれはなれぬ

まごころこころをかくぬはかりそらにまはれ

崇徳院

おひ健にけりこころをかくぬはかりそらにまはれ

たいらら

流はぬらぬおはれはなれぬおはれはなれぬ

下止五

おまのあしはきいふうりりりきをわとち付たれ
よあは

はらうおきまのいふれはてえいあふらあ河ふあだ
むういふら入ああ象のあてらうはあはあん
まうまうころとらして付たれ

君まもるの雅来と定むえあふ入あてらあ
象はあはあてらあ女あこれとらあ物あてらあ
はらういふとらあ

あさうぬああれあああああああああああ
あああああああああああああああああ
あああああああああああああああああ

はらう守とく

都をいふにあてあてあてあてあてあてあて
あてあてあてあてあてあてあてあてあて
あてあてあてあてあてあてあてあてあて

あてあてあてあてあてあてあてあてあて
あてあてあてあてあてあてあてあてあて
あてあてあてあてあてあてあてあてあて

あてあてあてあてあてあてあてあてあて
あてあてあてあてあてあてあてあてあて
あてあてあてあてあてあてあてあてあて

鞆旅歌

和納三年三月ああああああああああああ
せはひあてあて

下止五

天保十三年十月

いそよとひまはれ松東正後世後のひらふた丹野翁

天保十三年十月伊世必よみゆきしりあひる

うた

いそよとひまはれ松東正後世後のひらふた丹野翁

あまのうらひかのかをを漕ねれ流石のまのりやまを初

あまのうらひかのかをを漕ねれ流石のまのりやまを初

たつらら

あまのうらひかのかをを漕ねれ流石のまのりやまを初

あまのうらひかのかをを漕ねれ流石のまのりやまを初

あまのうらひかのかをを漕ねれ流石のまのりやまを初

あまのうらひかのかをを漕ねれ流石のまのりやまを初

たつらら

あまのうらひかのかをを漕ねれ流石のまのりやまを初

あまのうらひかのかをを漕ねれ流石のまのりやまを初

あまのうらひかのかをを漕ねれ流石のまのりやまを初

あまのうらひかのかをを漕ねれ流石のまのりやまを初

あまのうらひかのかをを漕ねれ流石のまのりやまを初

あまのうらひかのかをを漕ねれ流石のまのりやまを初

あまのうらひかのかをを漕ねれ流石のまのりやまを初

あまのうらひかのかをを漕ねれ流石のまのりやまを初

あまのうらひかのかをを漕ねれ流石のまのりやまを初

あまのうらひかのかをを漕ねれ流石のまのりやまを初

下世下

十
六

白雲はかひなくわらふは雲の山はをりけり
東流やまれば中流はゆるみおるを舟は世をわたり
侍せより人へはうらみ

人と船は下へは流るるも上へは流るるも
たのしみ

信者の志意草履もてあはれ世をわたり我をわたり
舟を女はまよひりゆりまをふいりおるるのうらみ
らん

あはれ人のそとを救ふは世をわたり
ひさし〜くわたりまを人ののこふ
かうた歌のつらぬ歌のた〜うかみ余を〜う言れ
後述と

たのしみ

ふよきまをせうりなる命をたのめをばし
世のたを人の〜たを世にた〜に社とひ説かれ
思ひて〜ひきる女はおや〜て〜めゆり
なれと

救ふ〜は世をわたり
たのしみ

人からいふ〜は世をわたり
我よりいふ〜は世をわたり
今よき〜は世をわたり
ふ〜は世をわたり

下
七

春のよき東あきてさびか草葉はあはれをうつらと
秋の田んぼむぎの風のゆるるに秋の物あはれを
もく霧の神宮に鐘をたたくあはれにひそかに
大渡の松のうらむあはれに秋のうらむあはれ
白波のうらむあはれに秋のうらむあはれ
あはれに秋のうらむあはれに秋のうらむあはれ

雑奇上

入るか雲白き改大長家百ぞ、奇よまませ侍をるよ
立妻の心ぞ

年富(個)の津らく秋よをり若の社やをまはる

去江門内大長家よ、秋のうらむあはれに秋のうらむあはれ

をる

山陰やゆくて公存は秋をまはるあはれに秋のうらむあはれ

赤融院位よりあはれに秋のうらむあはれに秋のうらむあはれ

あはれに秋のうらむあはれに秋のうらむあはれに秋のうらむあはれ

表たる昔れ人をあはれに秋のうらむあはれに秋のうらむあはれ

はる

引くを秋のうらむあはれに秋のうらむあはれに秋のうらむあはれ

月あうく侍りたる秋のうらむあはれに秋のうらむあはれ

去るれ、神の心をあはれに秋のうらむあはれに秋のうらむあはれ

うらむあはれ

秋のうらむあはれ

秋のうらむあはれ

秋のうらむあはれ

秋のうらむあはれ

下止八

若海の妻の光のまをれを當にけり書けり

養徳
去後

柳

柳の葉に色づきては秋の風を告ぐ

枕に書きたれば又長にわきて侍者の歌に書けり

柳

春とくは柳の葉は秋の風を告ぐ種よりある人 貞徳公

延喜のころはひさびさ侍者の歌に書けり

東院殿承平八年三月のころに侍者の歌に書けり

月にはあまのひの侍者の歌に書けり

百歳よめは柳の葉をわきて侍者の歌に書けり

柳の葉をわきて

久壽のころはひさびさ侍者の歌に書けり

上東院世をわけて侍者の歌に書けり

み侍

柳乃のころは侍者の歌に書けり

東三條院女は侍者の歌に書けり

侍者の歌に書けり

侍者の歌に書けり

若海の妻の光のまをれを當にけり

東三條院殿
侍者の歌に書けり

侍者の歌に書けり

侍者の歌に書けり

赤坂路
侍者の歌に書けり

柳

下止九

后の朽木れ折盡れ、後方と思われうまぬ
後傍
去後食長

昔みよき、昔れ其かうう我身ひとつれおははる
後傍
去後食長

堀川流よおつりまう、なるは深流なるおの影れ
後傍
去後食長

さううと知るせよはるすうとく
後傍
去後食長

お起るにみらあ入の影様おちるひまひておち
後傍
去後食長

お望とに思ひやせん影様お深流を其まを
後傍
去後食長

高陽路までおのちるうとくうとくうゆりま
後傍
去後食長

あ世を始にひめる影おれやお世とんをを教
後傍
去後食長

枝上の末と白くおれ影をみお起とえゆりおん
二季
四月

を米はるうとくとくひうくちるてのちるの
後傍
去後食長

そのことと大内のおおにまうれまうれ
後傍
去後食長

よるおは
後傍
去後食長

まをへくみお起なるおの陰ゆり身をもおと
後傍
去後食長

お猪おれさうういまおのうとくとく
後傍
去後食長

うつういおせし時まうりておはゆりおま
後傍
去後食長

のどしく言ふしまをまおれなるおちおひ
後傍
去後食長

おくうとくおま
後傍
去後食長

下早

四十一

たのむくしてははる御風をそと年と白川の御風
嫌久に年未大古供養より幸の時身福方の
八重橋はうりなりをそとそ枝りむまひ
つけ竹をる

たのむくしてははる御風をそと年と白川の御風
嫌久に年未大古供養より幸の時身福方の
八重橋はうりなりをそとそ枝りむまひ
つけ竹をる

たのむくしてははる御風をそと年と白川の御風
嫌久に年未大古供養より幸の時身福方の
八重橋はうりなりをそとそ枝りむまひ
つけ竹をる

たのむくしてははる御風をそと年と白川の御風
嫌久に年未大古供養より幸の時身福方の
八重橋はうりなりをそとそ枝りむまひ
つけ竹をる

たのむくしてははる御風をそと年と白川の御風
嫌久に年未大古供養より幸の時身福方の
八重橋はうりなりをそとそ枝りむまひ
つけ竹をる

たのむくしてははる御風をそと年と白川の御風
嫌久に年未大古供養より幸の時身福方の
八重橋はうりなりをそとそ枝りむまひ
つけ竹をる

たのむくしてははる御風をそと年と白川の御風
嫌久に年未大古供養より幸の時身福方の
八重橋はうりなりをそとそ枝りむまひ
つけ竹をる

たのむくしてははる御風をそと年と白川の御風
嫌久に年未大古供養より幸の時身福方の
八重橋はうりなりをそとそ枝りむまひ
つけ竹をる

四十一

たのむくしてははる御風をそと年と白川の御風
嫌久に年未大古供養より幸の時身福方の
八重橋はうりなりをそとそ枝りむまひ
つけ竹をる

たのむくしてははる御風をそと年と白川の御風
嫌久に年未大古供養より幸の時身福方の
八重橋はうりなりをそとそ枝りむまひ
つけ竹をる

たのむくしてははる御風をそと年と白川の御風
嫌久に年未大古供養より幸の時身福方の
八重橋はうりなりをそとそ枝りむまひ
つけ竹をる

たのむくしてははる御風をそと年と白川の御風
嫌久に年未大古供養より幸の時身福方の
八重橋はうりなりをそとそ枝りむまひ
つけ竹をる

たのむくしてははる御風をそと年と白川の御風
嫌久に年未大古供養より幸の時身福方の
八重橋はうりなりをそとそ枝りむまひ
つけ竹をる

梅のあけ春の友をて風の書せぬ世中を教へん 大御云 忠教

鳥羽夜まで世のありうこ世に後して後と云

内大臣と語りせり

抑々世の中世のむねを今にけりてあはれ 鳥羽院

世ののりて後百と奇後作りなれよむれ奇

とて

今我より世の山は世とて宿の物語り今へりせれ 皇太后更 皇後殿

入居お宴白き政大臣奇今よ

去これにけり世とて世のむねをいふあはれ 世に

お好一 歌百と奇よ

て教月を世のよとていひある世は世に

春の比大雲下る人よはういへる

みとらあ志うけり清藤なるかう世の書れ か大御云 甚矣

たうらう

栄は片う白ん心とてあはれは御て今へり のや

喜中と長くあて教むの我を今とてあはれ 世に

東山よ春んよまるとして信とてこれとて ありは師

るをさうあはれとてとてまるとして はうい

世に

身をあひ心とては山梅風の信よあひ 世に 甚矣

たうらう

梅あこのあはれ浦波を今へり 世に 後教

下田下二

橋為伸 松尾みちのどくよ 侍多 阿奇あまこ
はつりー せうかへん

白波のともん 東林松山いん 松尾あまこ 此よの月 加藤
おのり 松尾あまこ 松の守あまこ 松尾あまこ

世をいへ 吉村の奥村 松尾あまこ 松尾あまこ
百々奇あまこ

折にあへん 松尾あまこ 松尾あまこ 松尾あまこ
子あまこ 松尾あまこ

妻はあまこ 松尾あまこ 松尾あまこ 松尾あまこ
松尾あまこ 松尾あまこ

あまこ

白林あまこ 松尾あまこ 松尾あまこ 松尾あまこ
松尾あまこ 松尾あまこ

松尾あまこ 松尾あまこ 松尾あまこ 松尾あまこ
松尾あまこ 松尾あまこ

松尾あまこ 松尾あまこ 松尾あまこ 松尾あまこ
松尾あまこ 松尾あまこ

松尾あまこ 松尾あまこ 松尾あまこ 松尾あまこ
松尾あまこ 松尾あまこ

松尾あまこ 松尾あまこ 松尾あまこ 松尾あまこ
松尾あまこ 松尾あまこ

下四下

四十三

中々の時客人の仕装束こそまづりて

唐衣冠の被よねとてよねとてまのまのまのま

は返

唐衣冠ならぬるまはれにこそ世のまのまのま

四月系村目こそよかちまのこきて侍る奉事の

それと使おのころよまのまのまのま

侍る

神代よ、お里のやまをん様むまのまのま

いつたのむとておひかて

侍るまのまの山の様おのころよまのまのま

おまのまのまのまのまのまのまのま

よとまのまのまのまのまのまのまのま

侍る

まのまのまのまのまのまのまのま

侍る

まのまのまのまのまのまのまのま

まのまのまのまのまのまのまのま

まのまのまのまのまのまのまのま

まのまのまのまのまのまのまのま

おまのまのまのま

まのまのまのまのまのまのまのま

まのまのまのまのまのまのまのま

四十四

それさきり多とこれおろよのそれと人り
とひつなれとやうさりたれと

うらましの伝言方人よまゝにねむにまゝ地獄小舟

五月あて定時て月あうく伝言赤海馬

六月あての秋ののちを地獄より白土屋
たりーらん夏後

独り宿れと夜初かく泪のあよぬれぬ日そおれ花山院
徳皇伝言よまゝにまゝまゝよまゝにひなる時おれ中
我孝ひうくまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

にほくてはうーる

よそつみと病たよかくゆまはふまへ喜まま

月あう伝言新人のやうとつてはうー
たをたれをぬすりまゝにうー和泉

あひあを秋れまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
たりーらん和泉

あひあれを病に秋れまゝにまゝに秋のうー七条院
伝言よまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに大納言

神の浦波の吹くを秋風よまゝにまゝにまゝに
業平船名の装束はうーて伝言中務

秋やう伝言やまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
伝言船名

四十五

と知くよきりしふとをたきに結る人の事は
るくりあひたる月のあく七月十日ころ月に
こあひてより作りなれい

めくまあひてはむきれをいぬまにまはれはよふの はまア

みこのまにゆく時少納言最宗修理年よりあれ 月教

ほろりまつのまつとせどろもむかぬにゆきり

おのひまろる事一さどはらん一て

月教の山は端かておれかむく浮世と我 か人 まま

たりーらん

山の端と出るとす月教と誂ぬれい まま か人

春嶺正光おあろ月教又思ひて人の将ふまより

是よりまるとえあろ一てはろり まま

浮雲のまわくせとを障りて定行月教 か人 まま

遊一

浮雲にこれくとそおひし種を月教 か人 まま

とあにまると日比とくゆんく まま

名跡物 まま

月とちそゆこれの まま か人

山里に まま か人

あひある人をあ まま か人

八月ま夜和秋 まま か人

ゆに

下四十六

和奇北浦より北風を吹かれ波は浪の月より多なり 辰巳 龍光

和奇北奇合は湖上月の如くいと静し

秋をさる浦より舟を渡り月を映する光景なり 辰巳 丹後

まのつらら

山の場より北風を吹かれ波は浪の月より多なり 辰巳 丹後

永治元年秋後ちりちりたる月より静し

後傳り

志道より北風を吹かれ波は浪の月より多なり 辰巳 後傳

崇徳院百々奇なるまのつらら

いふやと神光のやうなる月より静し

又治のころはひ百々奇より静し

てよめ歌

今よ北風を吹かれ波は浪の月より多なり 辰巳 後傳

百々奇なる一秋奇

昔は重舟を吹かれ北風を吹かれ波は浪の月より多なり 辰巳 後傳

月より静し

うねり世にちりちりたる月より静し 辰巳 後傳

石山より北風を吹かれ波は浪の月より多なり

都より人々静し石山の雲に静し 辰巳 後傳

たのつらら

あま地より北風を吹かれ波は浪の月より多なり 辰巳 後傳

月のあかりなる秋あひるの月より静し

下見

月分を事とて入りなれはうあな

後よ輝ていあせと鏡花に君さぬ秋は月いみぢき 源氏御

天の系るに独海まは被り月此あよきうか 増基法師

女此神は秋をまてまうのてあひさりきりさうひ

侍られ

たのめこ一人をまてまはあのに小秋はう月のみ うへん

月をといひおはれはあを松のきなく庭の松風 松政

おはれ おはれ

山里に月のみを一人とてそり風をまはれとも お大徳

松政を改大信大物まゆり 月奇おすまよま 善家

侍りる 侍りる

あゆの月けり糸と輝てを懸るの鏡はあゆり あゆり

おはれ 毎の奇命は山月の心をよめる おはれ

山の端をおくを松の本はまよを輝ら此はあゆの月 あゆり

和奇本奇命は源山鏡月といふ 和奇

終教ひさみ山の松のをいさるもまあるは明は月 明

熊井にまうてゆり侍りる 侍りる

奥山は木の葉のあつ秋風は絶く岩の月を輝る お大徳

月をあひさるの海をまに消く海山をこれに侍り 侍りる

下四十八

下四十七

山部のをよむ侍者

御徒ねはあまの御子のにたれ猶とく御月新 献系法師

たゞらば

曉の月をむらさきとてみり人かよふわらわれ 兼山院

有明の月をさきとて無ひたれ人か 伊勢大輔

恒ちれ 和泉守

秋の月を照水とて入く 大内

又此の秋有十余日月 藤原

よむ侍者

あひさし秋よわたりあひて 白鳥

たゞらば

月をさきとて 和泉守

有明の月をさきとて 伊勢大輔

恒ちれ 和泉守

秋の月を照水とて 大内

又此の秋有十余日月 藤原

よむ侍者

あひさし秋よわたりあひて 白鳥

下四七

白鳥

百首奇をくりに

神てま三平の秋の道にまを公の山はたの月

藤原

たつらに

心ある人の秋は月をみ河を起身はあがき

深光

手百首奇合よ

身はり起は月やあぬと神は昔から此歌をなれ

藤原

世とまむたふんとあひまなはは月をてよあ

五明の月よまゆは推さう山はの友と雲の重き

山里をて月の歌部をよふとくをよふは

ある

都なるあまきたる宿もむけくま月よある人物ん

老月の五明のは山里よりて或る月起まよとくをり

きぬ

あひまを何と思ふかあをれは都は秋の月

あ

有明の如外海は君とて人部の秋を秋は山

春日社奇合よ海月のころろ歌

大の戸ををくはくこのまきより神代は月は秋の道

雲とのまは起物とてあまよ月や精よま方北山

八層て秋を切む月のをすひは海はくは言山

月あう起秋定家秋はよあひて始をる小奇は

あまはらけふう起とへい月かうりよまのこま

下五

あはれなれをまうくゆきと起るりよ久く
あしとをひて波やひゆるよーやてその
やーるたとわたりゆてゆきてあーたはら
つゝ

あやあそこの月のかりは昔懐きよ物や又よん 法持遍
加はけ富の月ふとくむ我どおちむう 恒と 孫持法持
遍昭ちよて月をみる

あはれなれは久に教経で宿のち骨ぬ乃月 主衣聖賢
あひありてゆるる人の許よまうをきりたるり
まんわにすきていこうあきくるやとよ月のう
入てゆたれえ

八重藤茂なる宿は人を逢まうに月の教を流る 万葉集
たつらら

陽のあけの浦は津津淵よ萩舟のさよ月けは 秋
難波深志あひよあなる若田路も月傾けは 後
和歌本可合よ海色月といふこと

まはれ浦よ月の出はのさほのふ物宿露の夜を 文徳
のほむむ世の月教ののくよまにあはれを 養老
あはれいよあ人の世をみまうた月も宿物ハ 養老
くまのよまうてゆくにらくは切目宿よて海色

あはれとあはれをあのこまはらうまうあ
あはれとあはれにのちあはれ月宿浪のあまはれ舟 具足

下五十一

八十に於てはあまのついでに後百を奇めくよはく

志め是て今やと云ふ秋山の暮るかに松虫のあ

荒涼と秋の庭をそゑかたうしては人あはれ

雲ゆく海を山をこの秋に思ひたふたふと

風をゆく志のこころの秋に思ひたふたふと

清風懐旧といふこと

清風懐旧といふこと

清風懐旧といふこと

清風懐旧といふこと

清風懐旧といふこと

清風懐旧といふこと

下五十二

下五十二

秋のこれより身のおぼろむを歎て後ゆき

百来れ秋の嵐色よとぬられの昔れ病と消去人 女信と味

秋徳物信法の子れを月とてしよと信する付

ほつりし書る

秋をるを月と山満ににる月を非と存ん 大中納言 匡房

九月をるを小すくくを崇徳院よと書く

よる秋

正為秋の末葉にぬれぬとて其あゝ病を海と 大納言

山里よ恒信なるは嵐をきく起あゝとあ中納言

秋をく待よほつりし書る

数中に吹嵐よと書くとや秋都をぬり秋満き 後侍 大納言

一

世中に秋よぬれぬれと今嵐の書のとす 大納言

清涼院の庵よ裁法へりなる菊を恒さり給て

後物りし書く

秋よるを月と山満ににる月を非と存ん 大納言

九月をるを小すくくを崇徳院よと書く

たのしめ秋は人のうき心付ぬる付小あゝは為是 保順

書つらら

山川の岩り水をとめて独るに居るの書く 大納言

百そり書く

秋よるを月と山満ににる月を非と存ん 大納言

下五十二

寂勝曰天竺院の志ありしはあまの川を以て

君の代よりあまの川の堰を氷の中に去る所なり 高家

元補むむすし侍者家のこころに法あり

すまゝなるをいふはうぬて居るの堰を

きりけりたれしりはりし

流をかくるはる里ありしは昔は堰なり 赤後馬

山家やとありてあまの川を以て後書れあり

流の命消えしりてあまの川を以て後書れあり 法南院

書にせしむるは縁の心より免れ

拙山梢の書にせしむるは縁の心より免れ 皇太后

佛名のありたるを以て

附るて書れしはあまの川を以て後書れあり 赤後馬

苑山院ありてあまの川を以て後書れあり

これよりせしむるは縁の心より免れ

祖とありてあまの川を以て後書れあり 赤後馬

一

るに後とありてあまの川を以て後書れあり 赤後馬

たりし

老にせしむるは縁の心より免れ 皇太后

大なるは縁の心より免れ 皇太后

下五十四

雜歌中

兼冬九年九月紀伊國リ事付

白波の浪松之元の身向草寄世とて春の鳥也

白鳥寄

たゞらら

山嶽のいそこのさの松木みつる若山嶽とあらん

山嶽寄

芦花屋のさの松也記とてあまのさのさのさのさ

芦花寄

晴秋秋は望み河巻の雲を我望みのあまれり

晴秋寄

志乃あまの松とて煙風とてあまのあて山嶽

志乃寄

新波女は夜月をとりて煙草火の煙とてあま

新波寄

あつゝのさのさのさ

兼冬九年九月紀伊國リ事付

兼冬寄

志乃あまの松とて煙風とてあまのあて山嶽

志乃寄

折にさるるさの松也記とてあまのさのさのさのさ

折に寄

たゞらら

津波風松木に吹し新波浮煙とて浪とてあま

津波寄

志乃あまの松とて煙風とてあまのあて山嶽

志乃寄

生油の浦はあまの松也記とてあまのさのさのさのさ

生油寄

天曆は附風風云

秋風の関は松也記とてあまのさのさのさのさ

秋風寄

あつゝのさのさのさ

波戸の雲をさのさの松也記とてあまのさのさのさのさ

波戸寄

秋風不奇合は関は秋風とてあま

秋風寄

下五十五

人生ぬらぬ後の宮屋に板屋あはせは後た結ばせ
明石浦をよる光景

結ばせ
宮屋

あま小舟はささづきを浦風は松の影の月を社を

浦風
松影

磯舟のころを

和舟は浦を松の葉紙に緑を積りよするあまの舟

積りよす
あまの舟

子よ百も舟合よ

水たけの音はのたまひて ちけたる浦の松を

ちけたる
浦の松

浜色のころを

今更よほりしとそとわくせんあまの塩屋はあまの

あまの塩屋

むすめはかまきりてくさりて大溪のうらり

みそえりてくさ

大溪の浦はさざけりて松のうらぬをささりや

さざけり
松のうらぬ

大式之位とてわけてはよきとてわけて

侍人のあはれとて侍者の里よとのこもるさかん

侍者の里
のこもる

山

侍者の松は山をわけて侍の里よとのこもるさかん

侍の里
のこもる

教本の松は山をわけて侍の里よとのこもるさかん

およす松は山のこもるさかんをわけて侍の里よとのこもるさかん

侍の里
のこもる

百も舟はささづきを浦風は松の影の月を社を

沖津風秋をにたのきやたの浦の雲は松の影の月を社を

松影
月を社

浜色のころを

見渡せし宮屋のうらぬをわけて侍の里よとのこもるさかん

侍の里
のこもる

下五下

去神より其を百奇に中に入らざらん

あふとてや穢業擧らん世法を一志に備の誓はたき

いせよまはるる附する

経麻山を世をまに擧げくはふけり我身即ん

まのーらん

世中とんたごをいそがれ神に種を身はひひく

去れく又降り一物たるまのーの山をよめる

凡にひひくまは種のをに清くり我を去れ我を

まのーのまのーの山は若くくまを

みくよまのりたる

附去ぬ山よりぬの山をまのーの山に清くり我を去れ我を

たのーらん

去れを去れぬをその山に清くり我を去れ我を

まのーのまのーの山

苑をそと業はをいそがれ我を去れ我を

まのーらん

吾建をそと出ると身は種を去れ我を

いとひてを種をいそがれ我を去れ我を

まのーのまのーの山

一筋のたのまの山を種を去れ我を

去れ法親を去れ我を去れ我を

よるた

誰より思ひあててきまの言つれは風分は也 五家物語

吾羽亦て言合し侍りよ山家嵐といふを

山里、世れら起るるを復まひぬのあやなる旅は嵐よ 巨秋の流 丹後

百も奇事なりと記

松の言松の嵐を別ねきおぬる程の夏はをきり 家隆物語

たつらら

と志き起世を道中津次は嵐の風も心きて始を 珠光法師

お初たつ川横川よまゝりてうらあつ侍り

あつ小法師は流るる

奥山の暮れ暮るる分をよむる旅は星掃るを 持大納言 源氏

一

白鳥はあたらふ奥山の暮れ暮るる風も流るる あま

徳宮物語大系はよまうて侍るる小山里は

あや志起りまむへくきあつぬらぬなる人乃

侍れえい川こもりてうらまをむるわやまひ侍り

なれ

世中とそむ起ふとていづるを起るる大系は よる人 一ら

一

身をい川小壱は山と思ひついで小法師は人の心 徳宮物語

始う起山よまむ侍るるひー里の侍りたつてまう

きりに唐屋の心をとて人も侍るるをなまこ

うは起とくつ起つて

若^草は唐^イの^イ 唐^イ 後^イ 唐^イ

われ果て風もほ^草らぬ若^草は唐^イ小我^イ 唐^イ

た^イ 唐^イ

山^イ 唐^イ

山^イ 唐^イ

立^イ 唐^イ

山^イ 唐^イ

奥^イ 唐^イ

山^イ 唐^イ

か^イ 唐^イ

山^イ 唐^イ

今^イ 唐^イ

山^イ 唐^イ

我^イ 唐^イ

山^イ 唐^イ

世^イ 唐^イ

山^イ 唐^イ

世^イ 唐^イ

山^イ 唐^イ

お^イ 唐^イ

下五十九

唐^イ

唐^イ

唐^イ

唐^イ

唐^イ

唐^イ

唐^イ

唐^イ

唐^イ

唐^イ

たゞしらす

惟をみく多きらん山望の西障をさむく言れそ ありはゆ
志海をせて松山崎くからんたるさうねわあを
かじねるみまの志を山崎をて多とそあふ杉まの門 殿高の陸
法橋もよほ傳書る小人のまうてきてくれぬとて 左補
いそ宛傳たれそ

いづれき小倉れ山の志をて言ぬと人の名くゆき 乃余法師
後白河院栖庵もふおりしまうける不弱ひされ
引の志の使まてまのりもるふ

後白河院栖庵もふおりしまうける不弱ひされ
引の志の使まてまのりもるふ
たをくくるの傳もるこり

さ月川の流下きさふれたう世又あひて ともが 新羅院公
名のは大物をれきく執り傳書るあくたし

右大臣よおるまてまじし傳りたる
あつ世と有る物とて落川の絶ねれを執書るが 東上集
は 巻之三

昔よる絶せぬ川の来れとてむしを河終くん 春融院
きつしらす

武士の八十ち川乃細代たにさう波のひ来たる 人唐
布引の流つとよまうまて

我世とへ今自うあふくと構うひの洞の流とられたるむ 中納言
系極あきぬ大臣布引の流みまよりたりもるに 外平

下六十

水よれ空にみゆかひ白雲の立にまゝる布引の流 二葉果香 月六日

宮務曰天王院の障子に布引の流うささる不

久望れ天珠乙女う夜夜重井にささる布引の流 散末 有歌集

天の川系をせくぞく

昔さく天河系を尋て初なる起るを海む斗を 拾遺 左段六日

たりのらひ

天の河やうささるにさく紅葉れ橋の敷やうさ 散末 宮方抄

堀川院出付面そ奇なりを海よ

橋れ板を若む斗敷より重敷世ねんせり世 あすの 巨唐

天曆出付屏風よ園の雨れ名をうせさせ結る よ花鳥川

よ花鳥川

定なる起る小たてれ飛鳥川を海よ 海よ社有れ 中務

たりのらひ

山里に独神てたかか世にまむ人のさるなうさ あ大徳正 慈赤

山里ふうた世いらん友のさるさく あり

山里ふ人ささるさく あり

草の房をいしてさく あ大徳正 慈赤

都さかく久敷流り あり

物をれを慈勝よまにさる あり

まふふはなとく人のさる あ大徳正

あひ志れまふ人の慈勝よまにさる あり

ほのらひ

下六十一

世をむく山の南に松をよ昔の意歎きぬん 安法師

あり法師百奇すめてよませゆなる小

以月我若れ秋よ露垂て知ぬ秋の月をさるる

百奇奇なるに山家のさるる

今分れ松の樹に杉の房小の月を物と昔深と神 武月野皇

志知はむ山に秋は露よぬまに夕曉起の雲海の神 小竹良

忘れの欠たよとわ山家系操ハ言に傳わかれり 折政

八十奇なるなり 右殿大内

秋也といふ露のこ繁く秋果て草にわ川をなれ月 後東

後東法師身まうまのちさうとらほり 兼治

たさ木なるとか子とをれぬとにほりす 兼治

煙絶く焼人色なれば秋の秋に秋きを惟うらん 加藤守保

意く後津の園なる山寺にまうまのれ里なる小

寐並ぬまうまのゆなるよ席のさぬ垣あゝて

意よとく竹多とゆて後とさひゆかれを

八十奇なるのむとをゆりて傳あじたる案に瑞

山家奇なるなり 兼治

山里にさひる人のことゆはけ住居さるる 兼治

後白川院くれとせ給て後百奇なり

このえの朽く昔をたれゆりよとあぬ世 兼治

幽情百奇なるなり 兼治

いふせん後々生れ奥の竹の苑とる世中 兼治

下六十二

皇太后
兼治

むの後むうーをひ出侍て

ゆきか首をのぞき思ふ草葉集れ病よ神ぬじつ

程の御侍

たりーらん

雲のへの里れををぬき人いさそ山嵐のうせ

お大徳正

右袖のそむれつぎよわお怒の友よお怒のすこたお書

お引法師

山をのこし雲うきて志むる世のうひよたておの

志きお世を費一村よかぬて文よ考を思ひえん

首いー危のこ松よ奉納て嵐の書を袖よそきく

三舟もやけく後すもゆき坊を思ひやりて譲る

何かれ 我古のい世ころや後芽う糸に結ゆらん

百き奇よゆゆゆ

古のい後芽う糸よ成果て月よ砂まる人の侍

お大徳正

これや尻首をぬき人ぬきん草う病よ月れる

お引法師

人の侍よまらるてこれう世松の陰よおわく

あそひひまら

おをふとてまぬくお世い産おぬれぬ西階松の影か

病院もよまらうあひ志れり者人をはりし

ゆきふすれつゆゆゆ女あられぬよゆゆゆ

よゆゆ

石上婚違人をはぬれを荒たる宿よ萱摘たり

徳園法師

ぬーおん宿を

古とあひやしてそをさくる荒たる宿の言れ岩橋

志き法師

下六十三

当是法親王卒き奇よませゆりきる小閑居の
ころを

日くつひをこれ人を昔めてそれるる座の傍に絶

ものへまひりたるみちよ山人あまのこあへりきりて

ひんく

なを起る身心かろくす世う絶世中に何うの心

あつらひ

秋ふれを西里人のあま田山たちてを座を物と

あつらひをそれれとれ我それたのまをくつ

捨くいたるあそ

人磨

天智天皇
はろ

雑歌下

山

良貴のうれたは方にたれれ都へいさといふ人のたれ

若狭
太政大臣

日

天の東あつらひにあまをよひいさの治るはあつらひ

月

月あまのたつたあひしつ浦を鏡花のうはも

雲

山あつらひをひりきりてゆふたをみけのたつたあひ

霧

霧立て照日にかかみをほろふまといれよるあそ

下六十四

雷

雲ちりやうとつらつらむきく雲の里そまよふ人なる

松

老ねて松の郷をまよひたり我も髪の色は雪に似たり

壯

清くあはれおのづかしくおれをたれ名もむ人を笑ぬ

后

新堂の雲のたのむつら人をゆるらぬ人ありたり

海

海ありはるる水は底をほらふ人月う照らん

あつた

産屋のけりあひをまの霧の渡せぬ橋を我もあはれ

波

たうれ木とま白波と煙柱とられぬおれをほらぬ

たうらら

こゝ波やひくお風の海はゆらゆらあまれ神のつらみ

つらみ
しらみ

白波のよほらなまよひ世をくそあまれおれをほらぬ

ふらふら音かな

舟は沖波の中を老より舟はたつと眼あはれぬ

舟
あはれ

まよひらら

こゝらもおれあはれる方をほらぬおの波はゆる

おの
あはれ

いふせん身をほらぬおれをほらぬおれをほらぬ

おれ
あはれ

下六十五

一六五

あし鴨のさく入の氷はえの世にほくは我身なり 八唐

可鴨の羽風よあひく浮まれば空か紀世を誰う教え 大伴信 秋道松尾

なきされば松といふことをよく侍るる哉 源順

老にまるとたされ松の媽の縁を問あつをさよそに六 源順

山をむむしてよめ侍る 源順

長引の山中水に新れをまも白妙よされ老より 秋道松尾

あまたちをねとてさる人よさう侍くつうたて 法教の舎 秋道松尾

訓をばれ枝を打ては法は衣をきあそく侍 法教の舎 秋道松尾

后よきも侍ひらるとは法泉路の后家のはひ 法教の舎 秋道松尾

いさなり侍るるを出家のときさへもなりあそ 法教の舎 秋道松尾

夢のうは玉のほを打て今後侍るをたの志 秋道松尾

侍きとせぬ光はまもと満されあてむとく 法教の舎 秋道松尾

よ東門院出家の後のうのさう侍くしたらん 法教の舎 秋道松尾

まづ服のそとよさく侍の枝よ侍てま 法教の舎 秋道松尾

かゝる後衣はまをさひや侍る 法教の舎 秋道松尾

満よりん衣のまはれつたをまはぬ 法教の舎 秋道松尾

たゞら 法教の舎 秋道松尾

志海のまはるを此浦く侍れ今我身のい 法教の舎 秋道松尾

屋風のほは侍るまの浦く侍て侍る 法教の舎 秋道松尾

一六六

下六十六

古の短歌や煙とあそびねん人かをみね植うぬ北浦 一条院

かた言ふ光横川よのやりてうらあけつりよる

と波を流くはうりしきよ

都上り雲の八重と鳥山のよ川のあはせよるえん 天曆書

はな

百歳の内のことをあけて雲の八重と鳥山ははらう おえ

世をそむきて小生とくふわたりはるんつりもる

了後業平朝臣書れいと書ううやうてつとたう

とあはせよるてもうてらてゆめうとうあひあひ

こやとようつりもる小

あうとを何うおん浮世をもむ所は元経はあ 惟書紀

都の都に後つりもるは久きうとつれさうなる

人よはうりしける

重井と小居の言をきこはぬいよと程と素かをよる 女徴子

亭子院わたりわたまらん あはれん

白鳥くを登くうら風百歳はつらう秋は樹を思き 伊勢

後上を好むはうりしける

天津風物をお北浦にわたつたはる 後菜穂

二条院若提樹院よわう あき

しとおひわく大納言はまうりて侍る又の目

女房のしはうりしける

古れちよし まへん

下六十七

下六十八
六十一

寂勝曰天皇院の跡多に大波りきこもる

大波の浦よりおぼろるわたふ波は絶てつる層子

空き法障子載集うこまきくまりのるは

あゝに雲をそとせきそ先つて年ゆれとうこ

あゝに雲をそとせきそ先つて年ゆれとうこ

淡子多ゆきを流れほりそあひある浦よあひ

上東門院言陽院よおつてまゝをるふり

世に合たるたれをばらんして

流つをに人の心をみことと考を今をわつたり

こころをゆりてわたりて作りなれは

せしてそとくまに法言もせねをほつて作り

なるをさくく道法うつた

淡くぬんそのしるき羽川世に合へ水は流るを

奇なれと作られたるは右寄うあつてあつて

てまのりあるあつてうつて

玄の葉はたうをたうく流れは言はれあひ

松ねの今をたうあつてたうをたうのまに

大に奉用始て後上ゆつてられて草ゆき

てねりまをうつて

下六十八

草の葉をてまわす神は嬉しに絶て涙の露をこぼす

秋はうつらうつらとたのしみとてたひくともうつらうつら

人よはうつらうつら

嬉しとて言れやいづる思ふ思ふ方物を秋はたぐれ

返一

秋風の言せうせは白露の雨の思ふはあはれは

直に又思ひ侍るを物もたがみうらて秋一秋

物語して又の目

思ふ草はわらふ露もあつらんを思ふを思ふあはれ

返一

浅草生を思ふうせは思ふ思ひを思ふ思ふ思ふ

あつらひ思ふ人のくちや侍る

あつらん思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ

返一

秋の月の思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ

あつらん

秋の月の思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ

思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ

思ひにまうてらて侍る

定方思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ

思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ

世中の思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ

思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ

例あしぬるゆきうりしを勅寺よてよめたり

五歌

教に我古来の昔にゆにいはしうむむ石社にたれ

まよひららん

そのまゝ我身のとをきき若きか我世にめらる

うゝとひて世をひききにまむひ物あひ知れ

うむを天の中をまれねいけむとあつて

延喜はは時女衆人月通白く言ふ人語りたる

くらまよるまこれあつてのまねをゆきりたる

檢那遠使のたうんどうとれはひはる下る

大空にてる月れをといふても天れににれ夜き

くひのたれえまうさありにたり

例あしぬるゆきうりしを勅寺よてよめたり

たれえ

あしぬるゆきうりしを勅寺よてよめたり

まよひららん

あつて世をまむんといふの月教を我をゆえん

教あしぬるゆきうりしを勅寺よてよめたり

あつて世をまむんといふの月教を我をゆえん

あつて世をまむんといふの月教を我をゆえん

あつて世をまむんといふの月教を我をゆえん

うむぢくを頼る死物、世に争ふ身とておれらるる心
幽懐の心とよあはれ

身のうらみとあはれをいふせんいふせんを頼る心
何事とあはれをいふせんいふせんを頼る心
いふせんいふせんをいふせんいふせんを頼る心
あはれをいふせんいふせんを頼る心

和歌取まで幽懐の心を

山里の奥に居る荒れ人まゝの心なほあはれ
神に憂鬱をいふと母に大なる泣き声
君の世よあはれをいふせんいふせんを頼る心
大なる世の心なほあはれをいふせんいふせんを頼る心

右の心
左の心
右の心
左の心

和歌の浦に沖津津あはれいふせんいふせんを頼る心
世の心なほあはれをいふせんいふせんを頼る心
君の世よあはれをいふせんいふせんを頼る心
物なほあはれをいふせんいふせんを頼る心
子に世の心なほあはれをいふせんいふせんを頼る心

右の心
左の心
右の心
左の心

我が世よあはれをいふせんいふせんを頼る心
物なほあはれをいふせんいふせんを頼る心
子に世の心なほあはれをいふせんいふせんを頼る心
我が世よあはれをいふせんいふせんを頼る心
物なほあはれをいふせんいふせんを頼る心

右の心
左の心
右の心
左の心

世を捨てて身をたてしむるは

世の中を
志す

西懐の心をよめて作る

捨てるは我身を捨てて世をたてしむるは

世の中を
志す

たつらふ

うねりあつてあはれ母の世を捨てしむるは

世の中を
志す

世を捨てて身をたてしむるは

世の中を
志す

世を捨てて身をたてしむるは

世の中を
志す

世を捨てて身をたてしむるは

世の中を
志す

世を捨てて身をたてしむるは

世の中を
志す

世を捨てて身をたてしむるは

世の中を
志す

世を捨てて身をたてしむるは

世の中を
志す

たつらふ

老くの月日いそぎ世間を捨てしむるは

世の中を
志す

後でつくる百の命を深き世を捨てしむるは

世の中を
志す

つくる世を捨てしむるは

世の中を
志す

世を捨てて身をたてしむるは

世の中を
志す

世を捨てて身をたてしむるは

世の中を
志す

世を捨てて身をたてしむるは

世の中を
志す

世を捨てて身をたてしむるは

世の中を
志す

世を捨てて身をたてしむるは

世の中を
志す

まのつらふ

世を捨てて身をたてしむるは

世の中を
志す

世を捨てて身をたてしむるは

世の中を
志す

世を捨てて身をたてしむるは

世の中を
志す

世を捨てて身をたてしむるは

世の中を
志す

二十一日

おちのちとて人の心を死に候ふに月をいひて

いふて今も世に生かしのつとせぬ物をいふと

わが法師山里よりて来る者出候へり

三月廿二日あつて候る事と申たりける返り

うき世の一月廿二日あつて候る事と申たりける返り

左様と申候へり

大元は候はしひの事と申月日をいひ候

あ大徳部合志を國のつとせ候へり

わが

人志れれとせ候へり

あ大徳部合志を國のつとせ候へり

うき世の一月廿二日あつて候る事と申たりける返り

際奥けいそと申候へり

よれ中のつとせ候へり

今日まで人を殺して候る事と申候へり

わが

為芝の病よわらそと申候へり

何とも申候へり

候事と申候へり

松の木れかけと申候へり

子年候と申候へり

下十三

下十三

たりらら

数句で世の情のほろろとけい法を松花の苑より
うらやまうく之を世をさするを松花の苑より

春日社奇合の松風といふ事を

春日社奇合の松風といふ事を
何となくさけは涙をこぼれぬ若れ被ふ松の世

皆人の心も世の中はゆれ社より身といふ世に
松花の苑の舞人よそは松花の苑の世に

して後松花の苑の世に
松花の苑の世に

松花の苑の世に

遊

いふへの山井は松花の苑の世に

松花の苑の世に
松花の苑の世に

秋の松花の苑の世に
松花の苑の世に

秋の松花の苑の世に

松花の苑の世に

松花の苑の世に

たゞしらす

あきれた中に流れる水の意いゝと云ふは秋はたふ

大津原
秋葉

たゞしらす

木枯の風よのみちて人告れそは秋のけふはか

小野小町

西橋百き奇よとけりる時を案を

嵐吹寄れば雲の目にさへくもあけり我かたが

白鳥原
交後

たゞしらす

うたねはあけく風をわらきとあはれ後ゆそとむの時

宗徳院
百奇

行のよ風かこよりの夕雲は物のわれは秋也とあ

大津原
交月々

夕雲は雲はあきとみうたかゆとあふんそはを

和歌
交月々

これねあきとみうたかゆとあふんそはを

海たまつる空は鐘の音はあすのあはれはあふん

西行法師

曉のころを

曉とほむれば梅をそとまてあきとあはれ鐘はあふん

中吉原
交後

百き奇

曉のゆめをまそあはれあふんあはれをあふん

交月々

尾よあふんとあひくあはれをあふんあはれを

あはれをあふんとあひくあはれをあふんあはれを

和歌
交月々

たゞしらす

たゞしらすのよめあはれをあふんあはれを

徳持へまいつて大書へいむとて奉はちやたひ

たゞしらすあはれとの海はあふんあはれ

七十五

後とてもつゝ遠く世をむきあはつりらん 大橋のり号

百首奇書一と記

恒山松守たつひてのわれを子と思ふはよ枝葉ひねる 志門 四六

百首奇書一と記

昔たよ書とあひひたおねの程ありまよれりき 空左衛門 五三 徳助

本橋百首奇書一と記

はらふれいとゆききりたれ程とあはれ程をすれ 後教のり

夕書よそののいともかよはれりてきりてきりてきり

はらふれいとゆききりたれ程とあはれ程をすれ 後教のり

たつらら

光まの月枝はゆれぬ病の命はをそはまはれぬ 西よ 四六

世をくたつあはれに世をくたつ人をたつてはり

あつ人よ

あらく吹風いふよとまはれぬとまはれぬ 末廣のり

和泉式アみちはらよまはれぬ後程あり教のり

和泉式アみちはらよまはれぬ後程あり教のり

う川ちてきり 徳吉社をきりてきりてきり うづま

あ

秋風いふとくゆききりたれ程とあはれ程をすれ 和泉式ア

病をきりてきりてきりてきりてきりてきり

乃るやとてはアを絶えよのよはらりてきり

七十六

すもあ敷うたやあくたあありてこらやま

賤の男は物あへよとつむる志は物あまの
のよか 山田法隆

教あまて今ひ素まの人もあまの月日なをあまの
法隆の通

あまの法隆まのあまのあまのあまのあまの
源隆光

うた世をいふ目とにいとあまのあまのあまの
公家なる金
法隆の通

あまのあまのあまのあまのあまのあまの
法隆の通

あまのあまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまの

り来ハ我ども思ふ人あらん首をさかむあひり

崇徳院より百首奇なるを奉り

世中をさひつゝねて神むきむねもさかみ清く白雲

百首奇よ

善哉まこと侍をき世のあはれにの末業は病一死を

津國よれらうてみまのあゝをん流て

世の因のあゝをんあゝをんあゝをんあゝをんあゝをん

たゞらら

凡早も萩の葉とたゞを病のとれなき程のた

秋風をさひく清きれ末毎に春白雲の衣世中

世の中ハまゝをさかむてをねらうとまのまのまのまの

神紙歌

初めをきよ乃子見れねおれおひん末をさかむあひ

はあは日吉の社日社殿のうららけあまうらら

子日して侍まるとよんのあまうららとあん

精あく物人津に我宿のあはれね梅の三枝を

このうららに迷之二年のまはらうららうらら

ららものゝ安樂寺のむねをねて侍まるとあん

あゝららとあん

補施為丹南の宿よまゝをさかむて入らうらら

はうららに身福寺の南無堂はくまをさかむらら

下三九

たるとまじりてはるのふれぬ神よりのまじり
とあん

秋やまをたかやうははるいこまのひあひのまじり
すまのーはは新とあん

いこうをまのひあひのひの松をいこひあひのまじり

とけいこいあひ人のfamaのーrethamのーひあ

あひいこまのーのまのまのまのまのまのまのま

あひいこまのーのまのまのまのまのまのまのま

むらまのーとまの白波瑞舞は之を世よりしをい初

い世物あつりよはるよーより昔の付初ん神

いあつりよのひとまのま

人吉れま今やく世もあはぬ神よりのまじり

このうこい待笑門地坂川屋まのこのうこより

くまのいまうてゆりたるよま目いまのまのまのま

ままのまのまのまのまのまのまのまのまのま

すまのまのまのまのまのまのまのまのまのま

る遠程をはるまへうまのまのまのまのまのま

このうこい待笑門地坂川屋まのこのうこより

てんと程をたかくてまのりてゆりたるよまのまのま

るまのまのまのまのまのまのまのまのまのま



いまた又婦たりたりを歎れ後にくくちると云
此の身にあまるとなる所の志はふとむと云
これ奇の身は志の異なることありきとてあまの
くまきとんと云ひてあまの人のまの心はあ
を物として信たる後よんくるとそ
さればむ人法はたうとそ又云ふてのちを
世後の世と云ん
鏡中をとりてみよこの名も種々の世に
これ又くまきとてたる人の後よんくると
あまの心とてつたれはとてたう人の心を我
石法もこれ世と云ん

為の満ちる白波のうすく河すくは人争は世を
けり、秘徳天皇御時和氣清光を宇佐依り
たぐまの治事と紀院宣し治ると云む
延喜三年日本紀竟亮し神日本書余彦
天皇
白波よ玉の姫はとて死にて終の泊ゆん 大正甲
嵯峨
久望はあめれ八重を踊り分てくは君と我をむ 紀伊彦
玉依姫
飛くちるあまのそ身はそ秋津鴨よ雲何し 三葉
雲霞の社れ身日くくひ信るう

下八世

大和を海は嵐の雨ふきおられの浦は舟つる

神系とよむ侍者

玉衣をよきとわね林葉のうねり人のあそび

源時家とよめ

美人のまねをよめたを思ふをたれ

大和は侍者時勅使して古神まよまうてよ

侍者

神風やみききう川の波のうねり

おれ一侍神まよとよむ侍者

紫あをそよふ川のゆふう

公徳公后勅使して古神まよまうて波のわり

侍者小秋ま女房れ中よりとらり

舞いよき色といふとよき人よとれ

侍

神風やみききう川の波のうねり

古神まよ中よ

神風やみききう川の波のうねり

侍者

まねをよきとわね林葉のうねり

神風やみききう川の波のうねり

いせの月よこれ

下八世

下三二

よゑ家

こやうなる響け言ねの書より響けの月よ此
神祇の奇としてよゑ家 杜

やうの書よりあまる響けおのまに響け秋の村 あまの響け 暮春

よゑ家初候よそより作り響けのちよゑ家よそ

よゑ家作り響け

まゆり又をみまけ響けよゑ家をすまの世に 中院入后 右大臣

入るよゑ家響けよゑ家を作り響け 白殿

神風よゑ家此川の響けよゑ家をよゑ家よゑ家 白殿 暮春 後鳥羽院

よゑ家よゑ家よゑ家

神風よ山田此系の神樂に響けよゑ家をよゑ家 歌あ

社殿納涼といふこと

よゑ家此川の響けよゑ家の響けよゑ家の響け 大中 月親

響けの響け響けよゑ家を響け

よゑ家響けよゑ家の響けよゑ家を響けよゑ家を よゑ家

よゑ家響け響けよゑ家を響けよゑ家を響け

よゑ家響けの響けよゑ家を響けよゑ家を響け

よゑ家

響けよゑ家を響けよゑ家を響けよゑ家を響け 清成院

響けよゑ家を響け

響けよゑ家を響けよゑ家を響けよゑ家を響け 用防内侍

下三二

文治六年女座内屏風は藤村家よりあるところを
よむゆりある

月さゆかみさじ川に影をくみ流せぬ山あひの神 皇太后
孝後院

ゆりて世に乱れあき事ゆきを白妙よりそつれか 梅家使
三巻

十と奇合の中に神祇とよ免状 お大徳
お大徳

若を初敷に候と人をつまむのまはあをのま お大徳

みあまにきて社の司とのくあひとをけけふ 後

後 後

松月みさのうらむ世に影をくみ流せぬ山あひの神 孝後院

鴨社の奇合とく人くよむゆりある小月を

石川やせこれ小川の流れ月を流を尋くうすむ 鴨長明

毎よゆきある時ま日集りてて因防内ゆり
はつり

万代を初とく流ゆたは世に影をくみ流せぬ山あひの神 中納言
俊仲

文治六年女座内屏風は孝目集

孝目集の神れああひくらんきて小波つる神風 孝目集
孝目集

天れゆみさの山れをきてむむ方たる身とま 孝目集
孝目集

孝目集れ初とく流ゆたは世に影をくみ流せぬ山あひの神 孝目集
孝目集

大東社は多うまゝりて。用防内付ふはつりて

子世とてくやきて地をひききと神をうけの山嵐の風 若東伊家

完勝曰天皇院の志ありしよと一月の山うさきる本

と一月山神は宮と松のえに堅く其のたれ物うハ 若大徳正 善清

自言社よたてくまうりて奇中又二言と

和之原をきり藤より是よりあはれは光る家にせむた

迷愴のころと

我たのむ七の社のゆたき花をそもふはたふくふか

とくあて自言の教うわ小洞のあき花はたふくふか

もろ人の神うしと川の溪風をん流くまきての言

水柱によつてくまうりてまはる

こめねまひあひあせく神をそあへ流した古の夏

徳社へまうて流るるみちよとれのことり流るる

とほらんて

はれ白ふむれきとみわに神はをそに志流 白河院

徳社にまゝりてまゝりて

若小むも昔婦をあはみ風の山のえむり事也 太上天皇

新言よまうりてまゝりて

徳社川をいふとせのみあはれをさすまわれね流の海

白河院くまのふまうて流るりなるおはとまのふ

志海やのまうりてまゝりて

まのなる志海屋は煙消風ふあひくと神は心をか 徳大寺 大徳

一五五

然此へもして作りしにどうも其事に人々其者
たも書射にせきまけし作りしにそのあきり
曲死つを作りしに

いへりあはれ神のまゝにまゝにむすむ世の夏林葉
ふまのふまにけく年のうち小遷る作りしに
事

契あれられ作りしにわひぬきりし末葉 木上天
か夜もして作りしと親白山にまゝにまゝに
り歌を思ひかき日暮れ客人のまゝにまゝに
作りし

幸始とて誠の白山忘れしにわひぬきりし末葉
事

一五五
一五五
一五五

恒吉の淡松をえよ風ぬき波のまゝにわひぬき
身帯便よ恒吉よまゝにまゝにまゝにわひぬき
たりまゝにまゝにまゝに

恒吉と思ひし岩の荒れまゝに神のまゝにまゝに
あゝ此屏風の後に十月神まゝにまゝにまゝに
にのまゝに人のりしを

柳葉にまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
延喜山時屏風よりまゝにまゝにまゝに
まゝに

一五五

河やうきれいごをへりておせしむる
ひらうん 君之

釋教奇

於たのめあちりあけうを草我世中にある
何うあけうの教を世中へ授けられし由
このうご法を説き出さんとあんにしつて
智縁上人伯耆の大山よりきて出るといふ
後よみくらう
山深く奉る我を有物といはれし月の
難波の川の寺まであーのをれさよくと
きて

あせよき青世の浪れりとう世中へ
り甚き

比叡山中堂建立の付

阿耨多羅之藐之菩提の佛を我と極真の
入るのうご

法の身にてり身をわくの神を仏と我とを
菩提寺に建せしむる

あつたあけうの法を世中に
みるの法を世中に
寂莫の菩提を世中に
縁法正念ありしむる

南無阿彌陀佛に
法務上人

南無阿彌陀佛に
法務上人

たゞららば

我たよそまの極系に生れ家出を志すぬを皆打てん

信部深法

天王の無舟の舟をばらんして

濁りたる無舟の舟を踏ひあきく心付かざるを皆打

上東門法

法華經廿八品に奇人にてよきをゆりたるなり

提婆取れんぞ

くつ河の底よりよきつる種をかくけりかたは身をぞ

法華の旨
を極深法

劫持取れんぞ

救ふぬ命は河のたぬ法とく河とを思ふをぞ

大綱を
詠儀

冬月をうきふ雲林院の菩提樹にまうてくつる
ゆりたる

はたけの林とみよこを法よあまれを嘆よとるを 狂海

涅槃經よきゆりたる樹をよるをよ池の氷もよけ

ぬちるをそれやあつた雲の物れをぞとく

人のせせゆれをまけうあつて一とてぞ

あつるう

岩川のかうれは流くをぬれをまけく月の影と

うらひぬ

西懐奇れゆ

祿うくはまはり暗ちたをすひてあまき世に法の灯

あまき世に
善寺

とくは法菊は白菊よるをいせはてはあて清命とぞ

極多入もく我んゆきつるはひつはあまき世にまれ

觀心如月輪若輕雲中れとるぞ

下八歌

下
午
半

我心をこれやらね秋意にほのぼよ有明の月 持信云胤

家二百首 音讀侍多 十界の心をよみて侍る

と御見侍る

たぐ山は独り世にこころを記すを風にか

持信
去後大后

心徑の心をよめる

色にのほほ心のかげをむかひとて法の候

小侍使

持信云大后家百首 奇よ十系侍るを侍る

と侍る 重亮末運樂

持信云法にこそ記す 小浮世をこころの候

持信

蓮花初開樂

これやけり世の心は法を人の心は法の心

牧樂不運樂

去秋をうけぬむに重亮をこれと記す候やハ

引接縁樂

立場りうらみ法にこそ候も縁記をよそんひく

法華經廿八品 音讀侍り多るに方便候有一系

法侍る

いづくも我法ありぬ法もあるとて吹風よそんさぬ

持信
去後

化城喻取化他大成郭

とふたうし世中をよそん 宿る奥中をよそん

分別功德取 或恒不運地

響の心をよそん 法の心ありて候る候ふれ候

下
午
半

普門品の念不足を

きくそむけきと思ひしは後候ねははあけく

水流常不流といふこと

そとあそくつれ身心そあそくつる満じ境のつら

先照る山

物日とて炭のつれめく免共海と東源若れ瑠草

敷よ百そ奇演傳多付必智の心を妙觀察初

底法くんれ身を重とてつらといふ此世をそん

初抄系

ゆは法とくといふとあはしむる法ふ久つる念と思え

法師加刀杖尾石念佛た慈恩の心を

深き觀れ客の由言せぬは浮世を水の無念也

五百のすも月秘菩薩の心を

古れ廉なり梵の房の心を此月八品をらるる房

人々そあて法文百そ奇よと傳りたり一ニ系也

定智如曇火

法の人の業身を去りて独り出たて居る此空

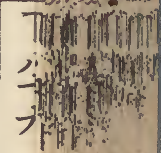
菩薩法涼月拾於畢竟空

空法そむけ現るに任かきつる現世身をわゆる月乾

梅檀香風悦可衆心

ゆく風よなまはる白くん若海ゆをを此座外

他是教已後至他國



丁九十一

やみ強死其れおと王に突垂て物立勇れ此の嘉を

此日已過命即表滅

夢みる如命を志うと抑えろは入道は鐘の聲を遠死

悲鳴幼咽痛慈本群

草添起りてこれ此理を立おてなまるといせる藤を写取

弃懸入をわ

そむすは河まは世にうめをわいておひきりた人よ

合舎有別離

空のそを疾ふ別る白雲のゆるは世のゆとり起が

関名歎性生

言にさく君りいはら起の松まうん物とん時くよ

心懐慈慕偈作於佛

あに持の面をの意起ふ愛中とらまよ山女の月

十戒奇蹟信をるよ不殺生戒

まの河の如起よ志むいさせてたのめあは法ぞ

不偷盜戒

浮草れ一葉たり花破之れおひかきそ沖津白波

不邪淫戒

けられたよ知り起るうのはよ存我書かぬ書あうを

不酤酒戒

心の中霧の情の程をあげおいれすめそまは山風

入るお冥白歌よ十如是奇よまさせ信をるり

不殺生

水芭蕉

う紀を初首にゆへと云はるいふは世を恨ては
待賢門院中納言人くはすめて廿八日此
よもせ侍考る小序取廣度徳元生を救ふ有重
乃と云を

酒と紀教をいふはね橋にふたふたを相見
英福門院は極樂去時後此結ふはゆへと奇考
へ紀より侍考る小候侍考る時又大氣法をききて
孫歎轟膽作せん
今それ入日とみくもあひとみよのほはれあき
晦よりて波の勢合の岸よりする如く

古人の尾上は鐘ふたはる岸お波のあつたは夢

百々奇中は毎日晨朝入徳堂の心を

静なる曉とにふ渡せし海は深起よの美そあつた
發心和袂集の奇書門取程は徳意題

逢るをいはくよとと整きう紀見れゆへ人を考る
西百奇子取れと云を

玉座をたつとてそとを考る心をいふ家
維摩神十喻中はけり如美といふ心を

美也ゆめ現如美といふねいふれり世にうめんといふ
二月十六日此考るに伊勢大捕りゆへとふつらう

考る

下七十一

第...の糖の便...
返一 お様

きふといそ潤ふこれぬ西の山...
伊勢左衛門

西へり...
橋川

あきと...
橋川

あきと...
橋川

西へり...
橋川

あきと...
橋川

あきと...
橋川

あきと...
橋川

あきと...
橋川

青み...
曙西上人

勤心...
橋川

晴...
橋川

あきと...
橋川

あきと...
橋川

新古今和歌集序

史和歌者群神之祖百福之宗也玄象天成
云際六情之義未著素誓地部三十一字之緣
甫與余來源流寔繁長綫雖吳或舒下情而
遠闕或宣上德而約化或屬於哀而書懷或採
絕色而寄言誠是理世慈民之臨徽賞心事之
龜鑑者也是以 聖代明時集句錄之名窮
精微何以漏脫然於崑崙之玉搯之有餘鄧林

之材伐之也盡物既如以歌亦宜然仍詔奏議
右為傳源朝臣通具大茂卿播原朝臣有家
左在清權中物者系朝臣定家前上總介源系朝臣
家隆右在清權少物者系朝臣雅經等不擇貴賤
意中全採編自玉章神明之朝佛施之作為表嘉
夷雜之同糝始於曩昔迄于當時彼以總編各
俾呈進每至玄圃苑芳之朝採菊風涼之夕射
雅波洋之遺流尋溪香山之芳躅或吟或採

拔犀象之牙角無黨甘編採翡翠之羽毛
裁成而得二千首數要之為二十卷名曰新古今
和歌集矣時令節物之篇屬四序少甲羅
危危雜詠之什並群鳥之雲布綵緯之致
蓋云備矣伏惟來自代邸之踐 天子之位
於漢宮之追汾陽之策 命上陛下之嚴親也
雖在際帝道之詰勸日域 朝廷之本室也
寧不賞我國之習俗乎今茲定 命歸美夷

詠化風化之樂可春去日野之草慈靡月宴
之契千秋秋涿洲之塵惟物微膺之為有載
時可灑滌亮採賤之志故撰斯一集永終傳
百王彼上古之可案集者蓋乞倭奇之源也編
次之起因准之儀會序惟邇煙鬱雜披延在
有古今集曰人合論命而後之天曆有後撰集
云人奉論言而後之其後乃撰送後撰送合案詞
苑千載等集雖亦於 聖王教代之勅錄悵

為撰者一身之家因茲訪延茲天曆二朝之遺
善定法阿涉虛五輩之英豪排神仙之居展
刊修之席而已斯集之為補也先抽可案集
之中更括七代集之外深索而徵長而遺廣求
而斤善必舉但雖張初於山野微會自述雖
連登於江湖小鮮偷漏誠皆視聽之不逮定
有篇章之猶遺今其隨採得且所勅修也抑
於古今者不載當代之 御製也 後撰而初加

其時之天章各考一節不備十餘卷今不入之
自詠已餘二十首古義若相若一兩語可足依
風骨之絕妙還有露詞之系加備以就道之思
不顧多情之眼凡厭取捨者嘉尚之餘持運
冲襟伏羲基皇德白罕年異域自難觀
聖造之書史焉 神武開帝功白八十二代當
朝未德 叡策之撰集矣定知天中之都人士
女謳歎斯道之遇逢矣不特祀仙洞無何之鄉

有朝風曉月之真亦歎皇皇家元之之歲有溫
故能新之心修撰之趣不在茲乎于時聖曆
乙丑壬春二月云尔

河野勝藏校正

嘉永五年壬子秋刻

日本橋通四丁目
須原屋佐助

